

師団歩兵第二四七連隊に所属、抑留地は私と同じソフガワニだった。共に三年ソフガワニに抑留生活を送りながら、生前お会いする機会のなかったことを非常に残念に思う。

シベリア抑留体験に思う

千葉県 伊 橋 芳二郎

戦後早くも五十余年、あの広島に次ぐ長崎に原爆が投下された八月九日、ソ連が突如満州に侵攻してきた。満ソ国境付近においては、全線にわたり苛烈な戦闘が展開され数多くの犠牲者を出した。日ソ不可侵条約など、いざというときは何の役にも立たないものである。

最前線にいた私達の部隊は戦線を縮小し国境西方の方正県方正に集結した。八月二十日に終戦に伴う関東軍の命令に従い、無念にも戦うこともなくソ連軍の武装解除をうけた。武装解除といっても、現地において

はそう簡単なものではなかった。数は少なくとも関東軍最後の一兵まで戦い抜くんだといきりたつ将兵もいた。また、既に終戦を耳にし、事ここに至っては止むなしとする隊員も多く、命令の徹底に日本将校が怒号する一幕もあった。こんな最中に数人のグループが現地逃亡をしようなど事態は險悪をきわめた。

武装解除は、部隊將兵全員の階級章と軍刀、銃剣全部を取り上げ、畑の片隅に積み上げられてしまった。残ったものは各人毛布一枚と飯盒、水筒だけの全員身軽な兵隊となってしまった。この様相は、一転無残、誰しも言葉にならなかった。かつての「生きて虜囚の辱めを受けず」といった戦陣訓もどこかに消え去り、心境複雑なるものがあつた。

私達は、たとえ武装解除をうけても関東軍である、このまま現地邦人を見殺しにしてよいのか、何か打つ手はないかと、呵責の念にかられ、互いに話し合ったが、そんな命令など出る訳もなかった。

まさか日本が負けるとは考えもしていなかったが、これで何とか死なずに日本に帰れると誰もがまったく

同じ思いであった。

私達はまず黒龍江を下り「ウラジオストック」から日本に帰れるということで、何の抵抗もなく輸送船に乗り込んだ。しかし途中突然船から下ろされ、意外にもシベリアの地に送り込まれてしまった。後でわかったが、何とその数約六十余万人と言われている。

初めて見た捕虜収容所（ラーゲル）は二重三重と有刺鉄線が張られ、四隅の望楼には自動小銃を持った見張りの大きなソ連兵が立っていた。ラーゲルの建物内は細い丸太を並べその上に乾草を敷き、毛布一枚でなんとか寝起きをしていた。

ソ連は日本軍の固い団結を恐れ、それまでの部隊をバラバラにし、五〇〇人単位のソ連式作業大隊を新たに編成し、各ラーゲルに分散した。

私達は「ピラ五三〇大隊」に編入され、ラーゲルでの本格的な現地作業が始まった。

ソ連では総ての労働にノルマ（一日の基準作業量）が決められており、体の小さい日本人にはこのノルマの達成はとても無理であった。作業は主に森林の伐

採、木材の積み下ろし、建築の手伝い、道路工事、農作業（じゃがいも掘りが多かった）など、ほとんどが初体験であった。

慣れない一日の作業もなんとか終わりソ連兵とラーゲルに帰る。途中決まったように軍歌の代わりに赤旗を歌わされる。しかし空腹、疲れきった仲間は歩くのがやっと、歌など歌えるものではなかった。やっと低い声で歌い始める、実につらかった。これもただただダモイと黒パンしか考えない餓鬼人間だったことを思うと残念でならなかった。

また、こんなとき、疲れ、歩くこともできない仲間を背負ってラーゲルに帰ってくると、背中の仲間が既に何も言わずに亡くなっていたこともある。これが痛みも苦しみもないいわゆる「栄養失調死」である。いくら体の具合が悪くても作業を休ませてはもらえなかった。シベリアでは女医にかかると、熱（三十八度以上）がなければ病人扱いはしてくれなかった。

シベリアの奥地でこうして仲間が死亡しても、ただ毛布一枚に包み、山裾の凹地にそっと横たえ（冬は地

下一メートルも凍っているので雪を覆う、線香もなく合掌だけの情けないお別れには涙も出なかった。

また、寒い夜などちょっと目を覚ましてみると、仲間にはみんな死んだように眠っている。ああ、このまま朝が来なけりゃいいと何度思ったことか。こんなときまた決まって寒空高くきれいな月が輝いている。ソ連の歩哨が近寄り、お前達もいよいよダメイダ、美しい今夜の月をよく見ておけ、日本にはこんな月はないだろうと言って何気なく去って行く。思えば少しばかり気の毒な面もあった。朝の人員点呼等のときも、なかなか人員が合わず、最後には数の教えやすいように五列縦隊に並べるようになった。

また、作業の帰りなどによく見かけるコルホーズの住民などは、共産国とは思えないほど陽気で、夕方にもなれば集落の片隅に集まってはよく話し、よく歌い、よく踊っていた。しかしその裏では徹底した共産主義のスターリンのやり方に誰もが反感を持っており、よく低い声で愚痴をこぼしていたが、絶対に公然と口外することはなかった。考えてみると、ただ割当

てられた農作物のノルマ以外には余り教えられることもなく、食事のパン等も配給で、何もない生活であったからだ。

私達の作業には、看守のソ連兵と、ノルマを報告する民間の現場監督が必ずついてきた。このノルマの報告により食糧がかわる仕組みになっている。いわゆるソ連の「働かざる者は食うべからず」といった鉄則が毎日のようにつきまとわり怖かった。

それに、食べ物は少ない黒パン（基準は一日三〇〇グラムだが、いつも少なかった）と水のようなスープには想像以上に腹が減った。春から夏にかけては食べられる草は何でも食べた。時には食中毒による死亡者までも出た。

また、酷寒零下三十度、地下一メートルも凍ってしまふ身を刺す寒さと、食糧不足、慣れない作業などのため、心身の疲労が極度に重なり、栄養失調による死亡者が初めて迎えた冬に特に多かったことが悔やまれてならなかった。

戦死でも、戦病死でもなく、今なお何の補償もない

まま、ただ異国の地に眠る国の犠牲者に対しては終生胸の痛む思いである。残念ながらその数約六万二千人に上っている。

こんな苦しいノルマに縛られた毎日の抑留生活を繰り返していた。入ソ二回目の春頃にやっと一度だけ日本にハガキ一枚の便りを出すことが許可された。本当に日本に着くかどうか半信半疑だったが、生存確認の決め手になるものと、みんな喜んで書いた。でも検閲がきびしく、漢字はだめ、片仮名だけ、内容も余分なことは書けず電文同様のものであったが、その後三カ月くらいかかって日本に着いていた。内地では消息を知り喜んで早速返信を出したそうだが、それは最後まで手元には届かなかった。

作業のない日曜日になると、全員シラミ取りが日課。中には自分達で作った将棋の駒や麻雀牌で楽しんでいる者もあり、一週間か十日に一度ある入浴が待ち遠しかった。

私達は「何としても日本に帰りたい」これがただ一つの希望であり、また悲願でもあった。民主化運動も

毎日夕方になると決まったように始まる。早くダモイしたければ一生懸命働くんだ、民主運動にも真剣に取り組むのだ、それでなければダモイはいつの日になるかわからないということは、誰の目にも明らかであった。

ダモイのためには、ときには本気で作業しノルマを上げた。また、あるときは赤の民主運動に顔を出してみたが、何の効果もなかった。その反面ソ連は「間もなくダモイだ」とだまし続けるばかりで、鉄のカーテンの裏側はまったくわからなかった。我々の強制労働は独ソ戦で疲弊しきった国土復興のためのシベリア開拓にあった。

しかし私は、シベリア抑留丸三年、昭和二十三年九月初めに幸いにも命あつて希望の日本に帰ることができた。シベリア最後のハバロフスクの収容所でのこと、夕方作業から帰ると、突然十人の者が名前を呼ばれ、お前たちはダモイだ、すぐ支度しろと言われた。持ち物は雑のうと水筒、毛布一枚だけで、仲間と話す暇もない程であった。今度だけは間違いなく海の見え

るナホトカに着いてホッとした。

最後の検査もすみ、日本船の信洋丸で無事舞鶴に上陸、夢にまで見続けていた望郷日本の大地を踏みしめた。中には子供のように喜々として一、二回飛びはねている者もいた。雲一つない青い空、そして柔らかな丘の緑が目にしみる。まさに一生一度の日本晴れ、実に感慨無量であった。

しかし、今なおシベリアの地に眠る声なき戦友の心情を察しては、ただただ断腸の思いを禁じえなかった。

また、終戦時満州（ジャムス付近）に残した女房は、生後間もない小さな男の子一人を抱え、死を覚悟し、行く先もわからず満州の広野をただ転々としての女性だけの逃避行であった。窓のない貨車の中は、毛布を敷き、着替えの入った風呂敷包みに身を寄せかけての仮寝の旅、時には駅もない野原の真ん中に停まり一日くらい動かぬこともあり、また、駅付近の空き兵舎や倉庫等に四、五日駐留避難するなどを繰り返し、ようやく最後は新京郊外の避難所に落ち着き、何とか

苦しい避難生活を送っていた。しかし、この間に残念ながら小さな男の子を栄養失調で亡くしてしまった。だが、終戦の翌年半ばに仲間と共に佐世保経由で内地に引き揚げていた。

思えば在満軍隊生活、終戦、武装解除、そしてシベリア抑留と人知れぬ体験を通じ、何事もやればできる逆境、貧苦に耐える精神力は今なお私たちの生活の中に力強く生き残っている。

今何一つ不自由のないこの平和な時代にこそ、往時をしのび、二度と戦争のないことを願い、世紀の歴史に永久に残る悲劇ともいべきシベリア抑留生活の一端を風化させることなく後世に伝えることが、私たちに与えられた責務ではないかと思っている。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正四年九月十八日生

軍 歴 昭和十年兵

昭和十一年三月 満州国公主嶺の機械化旅団独立歩兵第一聯隊第二中隊入隊

私の戦前戦後の思い出

埼玉県 菊田 鎮男

私は東京都（前は東京府下東葛飾郡）の東で関東大震災前に農家の四男坊として出生致しました。震災前と言っても生後十カ月でしたので何も記憶はありませんが、当時本所に親戚があり一家全滅したそうです。

村の構成も農家が主で、家々が点在し、ほとんどが田圃、畑、アシ藪で、どこにでもある農村地帯でした。小川には乗っ込み時期ともなると小鮒が群れをなして上ってきたり、時にはボラの大群が、夏にはホタルが雪のように舞い、秋には雀の休憩所であるアシ藪を利用してカスミ網を張り大量捕獲している人もいました。まれには歩兵連隊による払暁戦の訓練が行われる、のどかなところでした。

私の兄弟は男ばかりの五人で、全員が日支事変、大東亜戦争に関係致しました。長男は甲種合格で横須賀銃砲連隊、習志野高射砲連隊へ。次男は甲種合格で横須賀海兵団へ。三男は陸軍工科学学校卒業後、登部隊を経て陸軍兵器学校教官で淵野辺へ。四男（筆者）は甲種合格で三重県鈴鹿の第一氣象連隊へ。五男は海軍予備学生として卒後南方へと、それぞれの地へ参りましたが、三男のみ残念ながら戦死致しました。

徴兵検査の思い出として、当日朝の開始時間がきても同級生の一人が見えません。気にしていたら一時間ほど遅刻して到着。順次検査に入りましたが、検査種目ごとに担当官より気合をいれられ、一日中気が重かった思い出。帰りに同級生全員で喫茶店に集まり遅刻理由を聞いたところ、朝帰りと分かり皆で大笑いしました。

甲種合格後、徴兵官より希望兵科と希望任地の質問がありました。希望兵科については第一希望 工兵、第二希望 砲兵、第三希望 歩兵と答え、希望任地については上海へ辺倒でした。理由は、三男の兄が上海